

幕末薩摩の倫理的風土についての研究

—薩摩武士気質とその教育的土壌—

児玉 正幸*, 大坪 壽*

Research into the Spiritual Climate of Satsuma in the Dying Days of the Shogunate — *Satsuma Bushido and Gojuu Education* —

Masayuki KODAMA* and Hisashi OTSUBO*

Abstract

Kendo (traditional Japanese fencing) begins and ends with the utmost courtesy. In fact, those who take part in *kendo*, not only improve their fencing skills, but also cultivate their manners and character. In other words, practitioners of *Kendo* deepen their spirit through everyday *keiko* (practice). This custom goes back to the Edo period, when the *samurai* (Japanese swordsmen) cultivated their manners and character more than they improved their swordsmanship.

This paper seeks to research into the spiritual climate of Satsuma in the dying days of the shogunate-*Satsuma bushido* and *gojuu education*-.

The second paper seeks to clarify not only the secret of Takamori Saigo's character-building, but also the fact that, in the Edo period the *samurai* cherished above all polite manners and honesty, qualities which unfortunately have been almost completely lost in modern Japan, through striving for their ideological ideal.

KEY WORDS: ethics, *Bushido*, Satsuma, *Gojuu Education*

はじめに

今日、巷では、政治倫理や公務員倫理、各種の職業倫理が喧伝されているところから裏付けられるように、政官界の汚職の実態は目に余るものがある。霞が関本庁の汚職の実態は、知っての通り、厚生省や防衛庁の幹部にまで波及している。江戸教養時代から明治時代までの多くの日本人が天爵として身に備えていた誠の心は、今や地を掃った

感を否めない。江戸時代の国学者、本居宣長の作品の中に、日本人の国民性を言い当てた和歌がある。「敷しまの 倭こゝろを 人とはは 朝日ににほふ 山さくら花」¹⁾。すがすがしい「朝日ににほふ 山さくら花」は、今や出会い難い希少価値である。

そのような時代状況の中にあっても、本学剣道部では、学生諸君に文武両道に秀でたバランス感覚豊かな社会人になって頂きたいと念願して、日

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

本の伝統的武道の美点（心身の嗜みのよさ、即ち礼節や赤誠）が事理一如で伝授されている。

日本剣道は礼に始まり、礼に終わる。剣道を通じて心を磨くという精神性の極度の重視は、実は、近くは江戸読書階級たる武家の理想的人間像に遡ることができる。士農工商の画然たる身分差別制度を大前提とする徳川封建社会の中であって、非生産階級たる士が支配階級として、生産階級の農工商の三民に対して胸を張って生きるためには、農工商三階級の人々から尊敬される理想的人格の陶冶が求められた（山鹿素行著『山鹿語類』巻第二十一、荻生徂徠『太平策』）。太平の世の統治階級として社会の安寧秩序に政治的責任を負う武士には、心身の嗜みのよさ、つまり「礼節や赤誠」（『山鹿語類』巻第三十四士道篇・三十七聖学篇、山鹿素行著『原源発機諺解』）という道徳的責任（ノーブレス・オブリージュ noblesse oblige）も求められたのである。社会的規範とされた封建倫理（観念的教養武士道）に幾多の問題点が内包されているのは間違いないけれども、江戸時代には新儒学イデオロギーの強固な形而上的観念性に裏打ちされた美的倫理的侍行動様式が生み出されたのも、歴然たる事実である。本稿では、あえてその美点にのみ着目して、起筆する。

本稿の目的は、かつての日本人が具有していた国民的美質（礼節と至誠心）を象徴的に体现する西郷隆盛の無私精神（「敬天愛人の誠の道」）を生み出した、幕末薩摩の倫理的風土を多角的に研究する点にある。

当該第一稿では、薩摩武士気質とその教育的土壌（薩摩戦国武士道とそれを温存した郷中教育）について、その特色を整理する。

第二稿（他稿）では、幕藩体制下の全藩に通底する江戸観念的教養武士道との絡みより、西郷隆盛の無私精神の特質とその成立事情を明らかにする。

当該第一稿では、初めに、フランシスコ・ザビエル書簡抄を手がかりに、戦国時代の日本人（薩摩人）の性格を荒つかみする（一）。次に、その日本人（薩摩人）の美的倫理的性格を形成した薩摩の教育的土壌の特色を整理する（二）。

一、忘れ去られた日本人（薩摩人）の美質—フランシスコ・ザビエルの証言を中心に

室町時代以降、薩摩の坊津は鎖国政策をとる明国との密貿易の拠点であった。その坊津にパレレンのフランシスコ・ザビエルが到着した。時の領主は島津貴久、時に戦国時代の天文18年（1549）8月15日であった。翌年の9月末まで薩摩に滞在する間に、彼はイエズス会同僚宛に、薩摩人の性格について、慧眼な観察結果を書き送っている。それに依る限り、当時の日本人（薩摩人）の美的倫理的な性格が激賞されている。日本人（薩摩人）は会ってすがすがしく、名誉心が強烈で、誇り高く、節度を弁え、賭博と盗みを極度に憎む。その上、彼らは識字率が高く、アリストテレス哲学と西洋修辞学で理論武装したフランシスコ・ザビエルと堂々と渡り合えるだけの、知性と文化を有する、民度の高い理知的国民だと言う。キリスト教の東洋布教を志して、民度の低い地域（インドのゴアやマラッカ）を経由してきたザビエルは、極東の島国に文化の高い国民を見いだして驚愕している様が、彼のイエズス会員宛の書状²¹に発露している。

北川鐵三はその著『薩摩の郷中教育』の中で、ザビエル来薩当時の薩摩人の人格と教養を培った、薩摩・大隅の伝統的文化（学問・道徳・宗教）を精緻に分析して、奇しくもザビエル証言の確度を高めている³¹。

そうした戦国時代の薩摩に濃厚に継承されていた国民的美質（心身の嗜みのよさ）を象徴的に継受した代表的日本人が、幕末の西郷隆盛であった。

では、彼を育成した薩摩藩とは、如何なる藩であったのか。

太平の徳川幕藩体制下でも、薩摩藩だけは、戦国武士道を残す藩であった。薩摩武士に求められたのは、主君に対する忠義と戦闘マシーンとしての心身の鍛練であった。

藩主の島津氏に対する薩摩武士の忠節ぶりは、関ヶ原の戦いから幕末の倒幕運動まで一貫してい

る。薩摩藩士の心身の鍛練のためには、東郷重位を開祖とする薩摩示現流が幕末まで活用された。一撃必殺を極意とするこの剣法は、荒々しい戦国時代の匂いを残す剣法である。

薩摩藩士には忠義と武力以外は多くを求められなかった。薩摩藩では、太平の世だからと言って、多くの他藩のように、幕府の奨励する教養読書階級としての武士を増産する政策をとらなかった。武士に学問をさせると、理屈が勝って戦に弱くなる。武士は最低限の教養があればよいというのが、薩摩藩の基本的教育方針であった。主君に対する忠義と戦闘マシーンとしての心身の鍛練のために、薩摩では、郷中教育が実施された。その青少年教育制度の中から、幕末から明治維新後にかけて、西郷隆盛や大久保利通、大山巖（満州軍総司令官・元帥）、黒田清隆（陸軍中将・枢密院議長）、山本権兵衛（海軍大臣・内閣総理大臣）、東郷平八郎（連合艦隊司令長官・元帥）といった英傑が輩出したのである。

二、薩摩武士気質とその教育的土壌（実戦的戦国武士道とそれを温存した郷中教育）

(1) 薩摩戦国武士道の特色

明治10年に西南戦争で鹿児島士族（西郷隆盛や桐野利秋が率いる士族）が明治新政府軍に敗退するまで、鹿児島県はいわば鹿児島藩として中央政権に骨太に反骨する姿勢を貫いていた。明治初葉までは確実に、鹿児島には、戦国武士道が脈々と受け継がれていた。薩摩戦国武士道の特色は、戦闘マシーンとしての心身の鍛練や忠孝両全の道にあった。江戸時代に入っても他藩の武士に通有の学問研究（新旧儒学）の偏重は、薩摩藩では無用の長物であった。古来、薩摩武士に求められたのは、暮らし向きの貧窮には無頓着（質実）⁴¹ な代わりに、忠孝両全の道（主君への忠節・両親への孝養）を忘れず（『二才咄格式定目』第8条・第10条）、礼節を重視し（『同上』第5条）⁵¹、武勇を好み臆病や卑劣を生理的にさげすむ、剛健な気質であった。つまり、社会の安寧秩序を維持する選民階級たる武士としての、形而上的な美的倫理的

観念のために命を賭する行動力であった。理屈の多い人間や策を弄することに固執する人間は、薩摩武士道に悖るのである。裏表の無い快男児、「朝日にはほふ 山さくら花」が、古来、薩摩では愛好された。従って、鹿児島では今なお、同じ薩摩出身の明治の元勳に対しても、薩摩武士道に由来する県民の好みは歴然としている。大久保利通と西郷隆盛の人気投票を行えば、宛然枯木寒巖の如き、一分の隙もみせない冷厳な秀才官僚型の大久保よりも、政治家としては少々愚鈍ながらも懐の深い大器量人、剛毅木訥の西郷に圧倒的に軍配は上がる。

(2) 薩摩戦国武士道の形成過程

では、薩摩の戦国武士道はどのようにして形成され、明治維新後まで継承されてきたのか。

戦国時代の末期に、島津氏は俄然、九州全土を制覇する勢いを見せた。島津氏16代当主の義久を筆頭に、義弘・歳久・家久が団結して、日向の伊東氏の本城を陥落させて薩摩・大隅・日向の三州を統一する（天正5年）と、その余勢を駆って、天正6年（1578）には高城を包囲する豊後の大友義鎮（宗麟）の大軍団を斬り払って押し返し、天正12年には肥前の竜造寺隆信も制圧した。天正14年、島津義久は肥後八代に出陣して筑後・筑前を制圧、島津義弘と家久は豊後攻めに着手、家久は秀吉派遣の四国勢と大友の連合軍を豊後戸次川の戦いで撃破した。勢いに乗る島津氏は八州を統一すると、九州の太守を自称した。九州切り取りの過程で、戦闘マシンの薩摩武士には、形而上的な観念の鎧で身を固め、そのために深く死ぬ捨て身の覚悟と行動力、即ち薩摩独自の侍行動様式が形成されたのである。

しかしながら、豊前一州を残して九州制圧にあと一息というところで、天正15年（1587）、秀吉自ら率いる九州攻めの軍勢のために、島津の軍勢は押し戻されて、最終的に、薩摩・大隅・日向（諸県郡一郡）の三州に閉じ込められてしまった。島津氏に残された敗戦処理の課題は、巨大に膨れ上がった薩摩軍の解体と武士の生活保証であった。島津氏は城下士とは別に、大量の武士を領内各地

に自作農として分散させて、郷士（外城士〔麓郷士〕と在村郷士〔唐芋郷士〕）集落を点在させた。各外城では、城下士から派遣された藩選の地頭を頂点にヒエラルキーが確立していた。地頭から外城の行政を任された麓郷士の下に、在村郷士が庄屋や村役人として、村民を支配していた。蒲生の集落はそうした典型的な郷士集落の一つであった。彼らは無論、島津氏の政策上、薩摩土着の農民とは画然と区別された。島津氏は戦時にはその自作農たちに戦闘マシーンとして出陣させなければならぬから、平時から薩摩武士の誇りを強烈に自作農に持たせた。島津氏は、薩摩武士に土着の農民を徹底的に貶めて頭使させることにより、一旦緩急有れば、おっとり刀で戦場に駆けつけるだけの選民階級としての気概と行動力を、江戸時代（1608～1687）265年間、薩摩武士に保持させることに成功した。この奇跡的な歴史的偉観⁸¹は、江戸幕府が採択した士農工商の階級差別を薩摩バージョンで徹底することにより、達成されたのである。

(3) 薩摩郷中教育の特色

イ) 西郷隆盛の人格的魅力

西郷隆盛（1827～1877）は知っての通り、巨眼巨軀の人であった。この肥大漢は官軍総司令官として有能な戦略的政治家であった。彼は大久保利通同様、壮大な形而上の観念世界を構築する宋学イデオロギーに浸かりながらもそれに災いされない、現実把握に長けた確かな時勢眼と、形而下の思考力を具備していた。その点が、宋学イデオロギーの大義名分論にどっぷり染まって客観的な政治情勢の判断ができない、不器用な長州の吉田松陰やその門下生（禁門の変を惹起した久坂玄瑞や入江杉蔵、池田屋騒動で自刃の吉田稔麿等）との違いであった。彼を以て旧幕藩体制を終息させた最大の革命家とする点では、誰も異論はない。実際、明治2年9月の論功行賞時には、西郷隆盛には正三位が授けられて、藩主の島津忠義や盟友の大久保利通、木戸孝允の従三位を一頭地を抜いたのである。しかしながら、下級武士上がりの彼には、文明開化の新時代に即応した新国家のヴィ

ジョンが欠如していた。破壊後の建設のマスタープラン（天皇絶対主義下の官僚独裁新太政官政権）を苦心の末に構想することのできた大久保利通（1830～1878）並の明晰で、緻密な頭脳は、彼には欠落していた。大久保のような近寄り難い天性の威厳もなかった。彼はまた、子供の頃の怪我がたたり、武芸に秀でていたわけでもない⁸²。彼の人格的魅力⁸³は、横溢する正義感と大海のような包容力にあった。

西郷を特色づけるのは、宛然枯木死灰の如き、無私の精神であった。西郷は「命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人」（「遺訓三〇」『西郷南洲遺訓』：幕臣の山岡鉄舟を念頭に置いた遺訓で『孟子』滕文公篇が下敷き）という点において、俗人にとっては、誠に「始末に困る人」であった。この無私の精神を西郷南洲の遺訓で言い換えれば、「敬天愛人」⁸⁴である。世俗の塵埃の中にどっぷり浸かって生きざるを得ない私たちの眼から見れば、彼の無欲ぶりは奇跡に近いものがある。

明治維新後、倒幕の多くの功労者たちが新太政官政府の高級官員として、官尊民卑の傲岸な態度をむき出しにする中で、いわゆる官員風をふかす中で、西郷は例外的に武士の高貴な貧窮生活を守り通した。彼の質素な暮らしぶりには、日本橋小網町の向こう三軒両隣りも、そこの主が時の陸軍大将兼参議（明治6年5月10日歴任）とは予想だにできないほどだった。文明開化を推進する政府官員がこぞって、洋髪（ざんぎり頭）や蓄髯（官員髭）、洋服、草靴の流行を作り出すさなか、それを尻目に、西郷は前時代の風俗習慣そのままにいがぐり頭の無髯、薩摩絣に小倉袴、草履ばきというスタイルで、荒れるに任せた古屋敷から新太政官政府に出仕していたのである。明治維新前の西郷は人前に出る時には、それなりに身なりには十分に気を配り、通常、黒縮緬の紋付羽織に仙台平の袴、白足袋姿のりりしい装束であった点を想い起こせば、維新後の西郷の出勤スタイルは、明らかに時弊に対する当てつけの警世に他ならない。

戦国時代以降、質実剛健の藩風で知れ渡っていた薩摩人さえ、明治維新後は、二種類のタイプに分かれたのである。雑に言えば、明治10年、西郷

隆盛率いる士族の反乱（西南戦争）が鎮圧されるまで、薩摩出身者の中には、東京で心身とも洋風生活化する官員タイプと薩摩藩の武士としての矜持と高貴な貧窮生活を重んじる伝統的薩人が、併存していたのである。明治の開明思想家福沢諭吉は、かつて、『丁丑公論』の中で、それを証拠立てる資料を残した¹⁰⁾。

福沢諭吉が西南戦争（丁丑役）終結直後（明治10年）に、密かに『丁丑公論』を書き上げて、西郷隆盛擁護論を展開したのは、欧風化する前侍官員の姿に、日本の高貴にして美的かつ倫理的な侍文化の衰滅を福沢諭吉自身が危惧したからである。彼にとって、西南戦争の結末は、西郷隆盛に代表される武士道、つまり形而上的の観念に生きる侍の美的行動様式の消滅の予兆に他ならなかったであろう。そうした解釈に立てば、『丁丑公論』は明治新政府に対する痛烈な批判の書である。そうであればこそ、彼は執筆後20年以上も本書を筐底に秘さざるを得なかったのである。

では、薩摩に西郷隆盛という類稀な無欲恬淡な人格を出現させた実戦的戦国武士道を温存した薩摩郷中教育の特色とは何か。

口) 知徳体一如の実戦的戦国武士道を温存した薩摩郷中教育の特色

薩摩藩には、慶長元年（1596）から明治4年（1871）の廃藩置県に至るまで、城下士の居住区には、町内（方限）毎に、藩士の教育組織として、郷中制度があった¹¹⁾。これは薩摩特有の青少年の教育制度で、幕末には、郷中教育は歴史を回転させる偉材を輩出した。郷中教育の教育目的は薩摩藩の理想的青少年の育成で、そのために必要な学習活動形態が衆議を尽くす「穿儀（僉議）」という方法であった（慶長元年新納忠元手筆『二才咄格式定目』参照）。薩摩藩の「穿儀（僉議）」とは、全員が得心するまで衆議を尽くす方法であった。郷中教育の特色は、藩の特別な援助もなければ、特定の教師もない点にあった。町内の各家庭が輪番で学習道場（座元）となって、年長者が年少者の教育に責任を持つ縦割りの指導関係にあった。

以上の郷中教育に参画したのは城下士の子弟で

あった。それに対して、薩摩藩政時代の末葉には、第25代藩主島津重豪（1745～1833）が安永2年（1773）に本府学官講堂（のちに造士館と改名）を創建したのに伴い、島津氏の一門や門閥家の子弟は造士館教育¹²⁾に参画した。造士館は薩摩藩の藩校として、薩摩藩全土から、城下士の子弟はもとより、郷士の子弟も選抜入学させていた。しかしながら、造士館に入学できた優秀な城下士の子弟も実は、西郷隆盛や大久保利通に代表される如く、方限単位の郷中教育を重視して、そこに積極的に参画していた。

藩士の子弟は通例、6、7才から郷中教育を受け始める。6、7才から10才までの小稚児の面倒を見るのは長稚児、11才から14、5才までの長稚児の世話を焼くのは二才である。身近な二才駒になぞらえた若さはちきれる二才（元服してから妻帯するまでの青年）を指導するのは、20才以上の長二才（23、4才までの未婚の青年）であった。稚児（少年）の中には稚児頭がいたように、二才の中には二才頭がいた。長二才の中から選任された二才頭と呼ばれる青年が、郷中制度の最高権威たる郷中頭として、町内藩士の教育組織全体を仕切った。妻帯して郷中を抜けた先輩は若衆から「お先師」と尊称された。お先師は若衆の相談に応じることはあっても、郷中の自主的運営と自発的学習活動に容喙することはなかった。

西郷隆盛（1827年生）は24才まで郷中頭をつとめた。彼の率いる社中の若者、即ち「兵児」の中には、吉井友実（1828年生）や大久保利通（1830年生）、大山巖（1842年生）、西郷従道（1843年生）、黒木為禎（1844年生）、東郷平八郎（1847年生）等がいた。例えば、大山巖少年（稚児）7才の折の下加治屋町方限内の書物習い（経書素読指導）の師は、藩庁出勤前の22才の西郷隆盛（18才より郡方書役助）であった。

幕末期、この教育制度での青少年に対する教育の重点は、早朝、師匠宅で各郷中毎に始まる稚児相手の書物習いを別格とすれば、いつでも戦時に役立つ（常在戦場の）薩摩武士としての心身の鍛練に置かれた。書物習いと称する初等教育の素養は、せいぜい経書（『大学』・『中庸』・『論語』・

『孟子』の四書に『易経』・『詩経』・『書経』・『春秋』・『礼記』の五経)の素読と手習い(習字)程度で、史書(『史記』・『前漢書』・『後漢書』等)の素読にまで素養が拡大するのは稀であった。時には式日・式夜に、二才相手に「軍書読み」と称する軍書(『太閤記』・『真田三代記』・『三国志』・『武王軍談』・『呉越軍談』・『漢楚軍談』等)輪読会や「穿儀(僉議)」が座元で開かれたので、末席に同座を許容された稚児たちも二才と並んで、日中の歴史を学びつつ、武士としての心胆を錬成する機会にも恵まれた。

要は、薩摩武士に必需とされたのは、知育(教養)よりも、徳育(忠孝・礼節・質実・剛健の武士道)と体育(体力・武芸)、つまり戦闘マシーンとしての心身の鍛練であった。その手段として奨励されていたのが、肝試しとしてのひえもんとりであり、「武芸・角力・水練・山坂達者¹³⁾」であった。薩摩藩士の子弟は心の鍛練に刑場の罪人の肝を抜き取る競争を行い、身体鍛練に日々、立木の左右袈裟懸けの打ち込みを重ねて、一撃必殺の技の修練に励んでいたのである。戦国時代の薩摩藩には、剣術の諸流派が競合していたけれども、17世紀初頭に東郷重位が薩摩藩の剣術指南に迎えられると、その後、実戦即応の薩摩示現流兵法が他の流派を圧倒した感がある。薩摩兵児は示現流剣術はもとより、種々の武芸を嗜んだ。必修種目の剣術以外の「嗜むべき武道」(慶長元年新納忠元手筆「二才咄格式定目」10箇条〔東京大学史料編纂所蔵〕の第1条)として、弓馬の道(射術・馬術)、槍術、居合術、小筒・砲術、柔術等があった。正月に挙行された「破魔投げ」も、歴とした武士の体育行事の一つであった。

各社中の兵児は、先人の遺訓(忠孝の精神修養)を学ぶと共に志気の鼓舞を目的に、各種の年中行事に参画した。例えば、建久4年(1193)5月28日の曾我兄弟の仇討ちを記念して、徹肖の『曾我物語』輪読会(明治以降は、甲突川原で古い雨傘の山に火を放つ曾我どんの傘焼き)が毎年、同月同日に実施された。9月14日には、藩主が九死に一生を得た関ヶ原の敗戦を記念して、「チェスト関ヶ原」を連呼しながら鳥津義弘の菩提寺まで武

装したまま20キロの山道を駆け抜ける五里駆け、即ち妙円寺(明治初年の廃仏毀釈で廃寺、現徳重神社)詣でもやって、義弘の苦難を偲んだ。12月14日には、元禄15年(1702)同月同夜の赤穂浪士吉良邸討ち入りを記念して、各社中の兵児は、徹夜の赤穂浪士伝輪読会に参会した。

そうした薩摩特有の郷中教育制度によって、教学としての観念的教養武士道ではなくて、知徳体一如の実戦的戦国武士道が幕末まで維持された。具体的には、徳川太平の世にあっても、薩摩藩では、暮らし向きの貧窮には無頓着(質実)な代わりに、忠孝両全の道(主君への忠節・両親への孝養)を忘れず(『二才咄格式定目』第8条・第10条)、礼節を重視し(『同上』第5条)、武勇を好み臆病や卑劣を生理的にさげすむ、剛健な薩摩武士気質が維持されていたのである。

注

- 1) 『詠稿十六』『石上稿』(『本居宣長全集 第十五巻』筑摩書房、1990、462頁。
- 2) 『1549年11月5日付書簡第二七』『聖フランシスコ・デ・サビエル書簡抄』下巻(岩波文庫)、1977、26~28頁。
- 3) 北川鐵三著『薩摩の郷中教育』鹿児島県立図書館、昭和47年、60頁。63~64頁。
- 4) 鳥津氏が「質実」を奨励したことを証拠立てる史料として、慶長6年(1601)8月7日付『鳥津龍伯(義久)・同惟新(義弘)・同忠恒(家久)連署提書』15箇条(鳥津家文書之三所収1471号)が存在する。(下線部参照)

掟

前略

一、つねの振舞二汁二菜、しほ・さんせうハ此外たるべき事。付、私之大酒可、爲停止事。

後略

慶長六年八月七日

忠 恒(花押)

惟 新(花押)

竜 伯(花押)

それ以外にも、天文14年(1545)鳥津忠良日新斎(鳥津第15代当主實久の父)作「いろは歌」(「虎狩の巻」や「鳥津歴代歌」と並ぶ薩摩藩子弟のための公私の三大教材)を傍証に引証できる。

「すこしきをたれりともしれ、みちぬれば、月もほ

どなきいざよひの空]

「むかしより道ならずして，おごる身の天のせめにし，あはざるはなし」

- 5) 郷中教育で「忠孝」や「礼節」を重要視したことを推測させる史料として，以下の慶長元年新納忠元（貴久・義久・義弘の三代に仕えた家臣）手筆『二才咄格式定目』10箇条（東京大学史料編纂所蔵）が存在する。（下線部参照）

前略

一、はふばい中、無沙法之過言、互ニ不_レ申懸_レ、專可_レ守_レ古風_レ事、

中略

一、忠孝之道大形無_レ之様可_レ相心懸_レ候、乍_レ然、不_レ遊儀致_レ到來_レ候節ハ、其場をくれを不_レ取様、可_レ相働_レ事、武士之可_レ爲_レ本意_レ事、

中略

一、二才と申者ハ、落鬢をそり、大りハをとり候事にてハ無_レ之て、諸事武邊を心掛、心底忠孝之道にそむかさる事、第一の二才と申者にて候。此儀ハ、咄外之人たあて不_レ知事ニ而候事。

右条々、堅固可_レ相守_レ事。もし此旨相背候は、二才といふへからず。軍神摩利支天・南無八幡大菩薩、武運之冥加可_レ尽果_レ儀無_レ疑者也。

慶長元年正月 日

二才頭

右、格式定目百九十年余相傳へ、其儘ニ而傳來候處、文字等痛ニ付、各申談、寛政元年致_レ表具_レ者也。

平相中

それ以外にも、『烏津忠良貴久掟書案』10箇条（鹿児島大学附属図書館蔵）の第1条（本註13参照）や、次の「いろは歌」を傍証に引証できる。

「礼するは人にするかは、人をまたさぐるは人をさぐるものかは」

- 6) 薩摩藩の政治・経済・軍事の基軸となった郷中制度誕生の秘話については、『幕末の薩摩』（中公新書）、昭和62年、14～16頁；『西郷隆盛上』（同書）、1990、22～24頁、参照。

薩摩藩士族の全藩に占める人口比率が約3割弱で、全国平均の1割弱を大幅に上回っていた（原口虎雄著『鹿児島県の歴史』、160頁）。

- 7) 「祖先からの遺伝によって、幼少の頃から体は特に大きかったが、少年時代は遅鈍にして腕白であり、意地張りで読書嫌いで、別に天才とか神童とかいう閃きは見られなかった（『南洲百話』明徳出版社、平成9年、3頁）。

「十三歳の時、ある日の帰途、友人と議論を構え、遂に格闘に及び、友人から右臂に傷を負わされた。

後に傷は治癒したが、初めの程は腕の運動意のごとくならず、したがって武を断念して、専ら文学読書に精励すべく方向を転換した（『同上』、5頁）。

- 8) 福沢諭吉は、「丁丑公論」（『明治十年丁丑公論・瘠我慢の説』〔講談社学術文庫〕、1995、40頁）の中で、西郷隆盛の人柄を次のように賞賛している。「学識に乏しといえども老練の術あり、武人なりと雖も風彩あり、訥朴なりといえども粗野ならず、平生の言行温和なるのみならず、いかなる大事変に際するもその挙動練々然として余裕あるは、人の普く知るところならずや。」

「三〇 命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困る人也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり（『西郷南洲遺訓』〔岩波文庫〕、1998、15頁）。

「二六 己を愛するは善からぬことの第一也。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕謔の生ずるも、皆自ら愛するが為なれば、決して己れを愛せぬもの也（『同上』、14頁）。（旧仮名遣いや旧字体は、現代表記に変更）

- 9) 『同上』、12頁。

「敬天愛人の誠の道に随喜猛進した翁（『南洲百話』、110頁）、即ち西郷の「大胆識と大誠意（『水川清話』〔角川文庫〕、昭和59年、52～53頁）」に推服したのが、幕臣の勝海舟であった。

- 10) 薩摩の士人は古来質朴率直を旨とし、徳川の太平二百五十余年の久しきもついに天下一般の弊風に流れず、その精神に一種貴重元素を有する者というべし。然るに該藩の士族にして政府の官員たる者は、ようやく都下の悪習に倣い、妾を買い伎を聘する者あり、金衣玉食、奢侈を極る者あり、或は西洋文明の名を口実に設けて、非常の土木を起し、無用の馬車に乗る等、郷里の旧を棄てて忘れたる者のごとし。これに反して薩に居る者は依然たる薩人にして、西郷桐野の地位に在るものにも衣食住居の素朴なること毫も旧時に異ならず（『丁丑公論』〔前掲書〕、35～36頁）。

維新後の西郷は早くも明治元年6月に中央政府を離れて、故山の鹿児島に舞い戻っている。その理由として、藩主島津久光の上に立つ政府高官には就任できないという、君臣の忍び難き情があったのを勿論否定することはできない（明治2年7月付〔桂久宛西郷隆盛書簡〕）。しかし、大久保らの再三の出仕要請に西郷が容易に応じなかったのは、それだけの理由ではない。維新後の明治政府の高級官員たちの贅沢三昧と不品行に、最後の武士、西郷隆盛は慨嘆していたのである（明治2年12月付〔同上〕）。

「四 万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思う様ならでは、政令は行われ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱え、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏えに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し戦士者に対して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける（『西郷南洲遺訓』, 6頁。）」

革命精神を喪失した明治政府高官の虚飾の生活と精神的墮落を嘆いた薩摩人横山安武（正一郎）（初代文部大臣子爵森有礼の実兄）は、明治3年7月26日、諸藩代表者で構成する太政官集議院に対して時弊10箇条の意見書を直訴、諫止の屠腹を遂行した。その高潔な志しに思いを同じくする西郷は、「横山安武碑文」（『西郷南洲遺訓』〔岩波文庫〕, 80～82頁）を染筆した。

明治4年、薩摩藩割当の御親兵（明治5年3月には近衛兵に改名）を引き連れて、やっと中央政府入りを決意した西郷は、4月には参議に就任、代わって、それまでの参議で腐敗高官の筆頭だと西郷の槍玉に挙げられていた大隈重信や、その盟友の井上馨は、降格させられた。ところが、その後も、西郷が参議の時代（明治4年6月～明治6年10月）に、長州藩閥政府高官（山県有朋・井上馨）と長州出身の政商（山城屋和助・岡田平蔵等）との癒着事件が相次ぎ、西郷は心を痛めた。そうした貪官汚吏による一連の汚職事件の摘発に辣腕を奮ったのは、司法卿の江藤新平であった。

11) 「郷中」とは、各郷の小学習団体（「咄相中の意。『二才咄格式定目』に基づく郷中教育の慶長元年（1596）成立説の論証と、薩摩・大隅の青少年に対する寺院教育が慶長年間に郷中教育へ変革した折の政治的社会的背景要因の分析は、北川鐵三前掲書64～73頁、参照。

12) 造士館教育の目的と学生に対する教訓・礼節については、安永2年（1773）12月付『島津重豪掟書（修学諭告）』9箇条（追録旧記雑録巻129）、参照。造士館教育の指導内容・方法等については、安永2年8月付の『島津重豪掟書（学規）』7箇条（追録旧記雑録巻128）、参照。

造士館の教育内容と教育制度を大改革して、薩摩藩の教育の振興に尽力したのは、島津斉彬（重豪の曾孫）であった。斉彬は嘉永4年（1851）2月、第28代藩主に就任するや直ちに、教育改革に手を染めた。着手された具体的施策を列記すれば、奨学制度の創設（嘉永4年12月）（『島津斉彬文書中

巻120号』）、武士階級の次男以下を造士館へ登用する制度の創設（安政元年〔1854〕正月）、造士館選抜学生の国内留学制度の創設と選考基準の新機軸（朱子学以外の学究にも国内留学の門戸を開放）（安政4年〔1857〕9月）。

斉彬は郷中教育の刷新にも乗り出した。嘉永5年5月8日に『島津斉彬士風矯正論達書』（島津斉彬文書下巻1所収130号）を發布している。

13) 陰干ししたひえもん（肝）は、重病に効く妙薬として、幕末期には広く需要があった。知つての通り、徳川幕府の首斬り世襲役人、山田浅右衛門の副業は斬首の罪人の肝の売買であった。

天文8年（1539）正月付『島津忠良貴久掟書案』10箇条（鹿児島大学附属図書館蔵）の第3条、参照。（下線は引用者）

一、諸士衆中、忠孝の道第一に相守り、五人与中、むつまじく可_レ交事。

一、領地多き衆は、七書を習ひ、人数甄引・昇具・太鼓之合図・作法、常ニ調練可_レ有_レ之事。

一、若き衆中は、武芸・角力・水練・山坂達者、平日手足をならずべき事。但、所領持並無息衆中、其身相当之武道・武芸心懸、無_レ之輩ハ、所帯没収、其上、可_レ為_レ重科之事。

俊略

右条々、若違犯之輩あらハ、所領持之衆者、国所領没収、無息衆中、可_レ加_レ嚴科者也。

天文八年乙亥正月 日

忠良御判
貴久御判

（本論考は、平成10年度教育改善推進費による研究成果の一部である。）

（平成11年9月20日 受付）
（平成11年9月27日 受理）